

たぐみ

Craftsmanship

特集 民藝の作家と職人の仕事展

第54号

南蛮人の称えた

レキオ(琉球人)の尊厳

第二次世界大戦の際に、日本軍が戦地で将兵たちの慰安に供するために、韓国や中国の女性などを集め、慰安所で性的接待に当たらせたことが、永年批判の的となってきた。

さらに維新の会の橋本徹大阪市長が、軍による慰安所の設置や慰安婦の連行を肯定し、必要悪として社会的認知を求める発言をして物議をかもし、石原慎太郎前都知事の関連発言などもあつて、海外へも広く報道された。

中韓のみならずアメリカ政府高官からも容認し得ない暴言として非難を浴びたが、相も変わらないモラルと常識の欠如を批判するだけでは、この問題の本質は判らないと思う。

戦いや民族紛争の際の、女性や子供への辱めやかどわかしは、古代ローマの時代からあつたかも知れないが、少なくとも現代において、社会的弱者や

女性に対する人権の侵害は決して容認されることではない。

桃山時代(一六世紀)の宣教師の記録に、秀吉による朝鮮侵攻や国内の戦さで捕らえられた男たちや、女、子どもが分けて鎖につながれ、長崎、平戸からポルトガル船に積み込まれ、遠く海外に売られる光景が出てくる。

大航海時代といわれたその時代、香料や胡椒、金、銀ほかの財貨を求めてヨーロッパからアジアまで交易船が行き来したが、ポルトガルの外交官トメ・ピレスの「東方諸国記」によれば、「欧州でミラノの繁栄について語るように、アジアの人はレキオ(琉球人)についてこう語る。彼らは正直な人で、奴隷を買わないし、全世界とひきかえてでも自分たちの同胞を売るようなことはしない。彼らはこれについては命を賭ける。」

世界的な奴隷貿易の時代に、沖縄人は毅然として人々の人権を守つたのである。

(八頁へ続く)

たくみ特別展

「民藝の作家と職人の仕事展」

会期 平成25年六月一五日(土)～二二日(土)

六月一六日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 一時から一九時まで(日曜、最終日は一七時半まで)



掛時計(日本)



動物絵花瓶



しじら織(徳島)



ウィンザーチェア

出品品目

●陶 濱田庄司、島岡達三、船木研兒、

金城次郎、小橋川仁王、新垣榮

用、五十嵐俊樹、上田恒次、成

井窯、本郷、瀬戸、益子、松代、

古伊万里、唐津、萩、中国、韓国

草木染着尺、正藍木綿反物、地

織麻反物、琉球緋上布、葛布、

阿波しじら着尺、本染浴衣、八

重山ミンサー、フィリピン・ア

バカ布、インドネシア緋布、萌

木会染布、そのほか

●木 松本家具ビュロー、棚、椅子、

李朝膳、文机、琉球朱盆、茶卓

●雑 吹きガラス、掛時計、自在鉤、

竹製品、玩具、錦絵

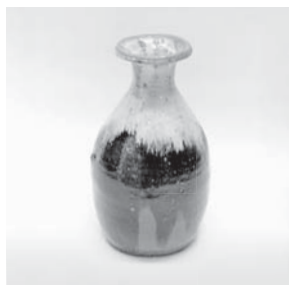
●本 柳「工藝の道」初版、「現代の

陶芸」民藝の部、池田「李朝木

工」、「芹沢・手控帖」、西脇「越

後のちじみ」、「手漉和紙」毎日

新聞社、「ジスイズ・ジャパン」朝日新聞社、そのほか多数



朝鮮唐津徳利（十二代・中里太郎右衛門）



湯呑と六角皿（成井藤夫）



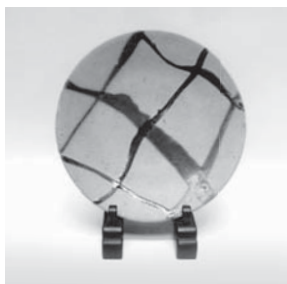
緑釉抜絵流文皿（島岡達三）



家形香合（佐久間藤太郎）



揺落ぐい呑（島岡達三）



白釉流文皿（島岡達三）



荒焼シーサー一対（新垣栄用）



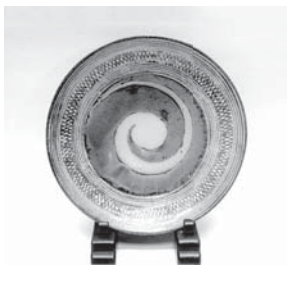
白釉流文皿（島岡達三）



染付そば猪口（古伊万里）



赤絵花生（小橋川仁王）



地釉縄文象嵌見込緑釉皿（島岡達三）



打掛三升蓋壺（小鹿田焼）



土製武者人形



愛染明王(笹島喜平)



自在鉤



段付水差(琉球ガラス)



耳付花入(十三代・坂田泥華)



分銅付秤



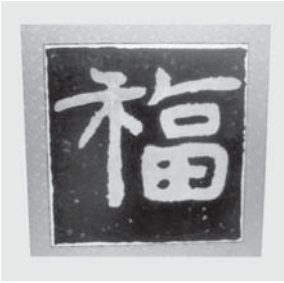
西洋ランプ



瓢形徳利(丹波直作)



柿釉緑流陶椅子(益子焼)



泰山文字「福の字」(中国)



樺樹皮モザイク小箱



金具付小抽斗 (李朝)



柳宗悦選集



葛布、蕃布 (台湾)



十二角李朝膳



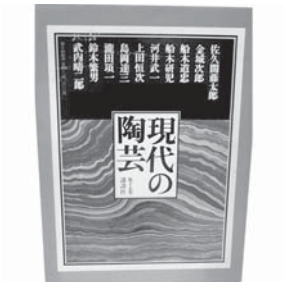
工芸の道、六十年前の今



隅切木鉢 (韓国)



木製ちゃぐちゃぐ馬子 (南部)



現代の陶芸



文机 (日本)



肩切びく(鹿児島)とアンツク(沖縄)

エッセイ

絵蠟燭

瀧田 項一

「華燭の典」という言葉がある。

華燭とは花模様で飾った蠟燭をさすのである。会津地方では、つい先ごろ迄、と云つても約五十年ほど前のことであるが、婚礼の席には必ず壺対の「絵ろうそく」を灯して、仲人の唸る「高砂ヤアア」の謡のなかでこの「絵ろうそく」を間に向い合つた新郎新婦が、契りの盃を交わしたものである。まさ



会津の絵ろうそく

に華燭の典と云えよう。

その会津に伝わる「絵ろうそく」であるが、漆器の生産と関わりが深い。漆器の仕事が盛んになり、藩主の庇護のもと漆樹の栽培が行われ、その漆の実や櫨ははの実から木蠟を採り、ろうそくが盛んに作られ藩の行政に大きく関わりをもち、やがて「ろうそく」奉行所

エッセイ

ユク

三浦 正宏

平成二十五年二月、北海道日高管区びらとり平取町二風谷地区にふたにに伝承のアイヌ工芸「二風谷イタ」と「二風谷アツシ」が国の伝統的工芸品に指定された。北海道では初めての指定品目であり、これですべての都道府県において一品目以上の指定が出揃うことになった。この指定で国の伝統的工芸品は二一五品目になる。「二風谷イタ」はアイヌ文

が設けられるに到つたのである。

その当時の明かりを司る役所であり、いかに蠟燭が重要な産物であったか窺えるのである。ろうそくの白い肌肌に描かれた花々の模様は、こよなく可愛くもある。

(筆者は烏山在住の陶芸家)

様が彫り込まれた木の盆、「二風谷アツシ」はオヒヨウの樹皮繊維で織られた織物である。

指定産地の平取町は人口凡そ四〇〇人。その七割がアイヌ民族の血を引くといわれる。北海道では明治初期から旧土人保護法ができる明治三十二年ころまで、アイヌの生活文化はことごとく失われていったが、しかし平取地区では自らのアイヌの尊厳と伝統文化を守るために、儀礼、言葉、舞踊、料理、工芸などの伝承が途絶えることはなかった。明治十一年に日本を訪ねた



アイヌ工芸「二風谷イタ」

イギリス人のイザベラ・バードは、著書『日本奥地紀行』に「平取はこの地方のアイヌ部落の中で最大のものであり、非常に美しい場所があつて、森や山に囲まれてゐる。村は高い大地に立つており、非常に曲がりくねつた川（沙流川）がそのふもとを流れてゐる。わたしたちが部落の中を通つていくと、女たちは恥ずかしそうに微笑した。男たちは上品な挨拶をした」と記している。



エゾシカ

かつて平取地区を含む沙流川流域には十七カ所のコタン（アイヌの村）があつたといわれるが、それは多くの人を養い得る安定的な食糧補給がなされていたからであつた。その一つはユク（鹿）であつた。狩猟民族であるアイヌは、ヒグマ、エゾシカ、ウサギなどを主な獲物にしたが、とくにエゾシカは重要な生活資源とし

て大量に捕獲された。

鹿の大量捕獲にはコタンの共同狩猟として「追い落とし猟」が行われた。崖上で女性や子どもたちが遠巻きを作つて鹿を集めながら崖の突端に追い込み、崖下で待ち構える男たちは逃げ場を失つて飛び落ちてくる鹿を捕らえるのである。

平取町と門別町の町境にユクチカウシと呼ばれる崖がある。沙流川西岸に突き出たその崖はアイヌ語でユク・ク・イカ・ウシ（鹿が・断崖を・こぼれ落ちる・所）と解される。こうした鹿の追い落とし猟を伝える地名は、北海道には各地に残つてゐる。

東北地方では、青森県深浦町の行合岬いさあひがそれである。行合はアイヌ語でユク・カイ（鹿が・折れる）と読むことができる。

日本海に突き出た美しい岬に、そのむかし鹿を追つて暮らしていたアイヌの人たちがいたのであろう。

（秋田県民藝協会会員）

二・二六事件反乱軍兵士の 哀しきものがたり

日本は島国であるだけに、美しい物語も、哀しい話も後世に記録され、伝承されやすい。中世の山椒大夫の話も、母子兄弟が売り買いされて離れ離れになり、お互いに訪ね訪ねて、長い時を経て、盲目となった母と再会する物語だが、このような話は身近にゴマンとあつた時代もあつたのだろう。

日本では平家物語絵巻(一二世紀)の「富士川の合戦の巻」に、ある宿場に特設された遊女宿で、甲冑に身を固め長刀を担いだ武者たちが、女たちの品定めをしている図がある。その女たちもほとんどが売られ、さらわれてきた女性であつた。

戦国時代には大きな合戦の場所には、息絶えた侍の刀や甲冑を身ぐるみ剥ぎ、逃げ遅れた土地の女性をさらって売る奴隷商人の集団の出没が文献にも散見される。

あまりマイナス思考の話ばかり書きたくないのだが、そのような負の側面の歴史的事実についても正しく知ることが必要であろう。

昭和十一年(一九三六)二月、日本の対外進出をすすめるために政権の刷新を意図して、陸軍の若手将校を中心に決起したいわゆる二・二六事件(齋藤実元首相、高橋是清蔵相らを暗殺)の軍事裁判で、実行犯の一人、東北出身の若い陸軍中尉が、涙を流しながら、自分を士官学校に入れるために、姉と妹の二人が女郎として身を売らざるを得なかつた農村疲弊の実情を述べたことは知られた話である。

世界経済がグローバル化され、アラブ、アフリカ、中南米も大国の技術と資本が入って開発が進むなか、一般民衆、とりわけ少数部族などの弱者がどのような実情におかれ、また取り残されているのか、知って欲しいと思う。

(志賀直邦)

あとがき

本誌も昨年末に五三号を出してから半年の間があきお詫びを申し上げます。一つは私が、今年一月から日本民藝協会発行の『民藝』誌に「民藝運動九〇年の歩み」を連載執筆しており時間に余裕がなかつたこと。もう一つは前回共感のご意見が多かつた「韓国、中国との融和について考える」の継続原稿が、昨今の複雑な社会政治状況から慎重を要するためであります。

小生の『民藝』への執筆も、韓国や欧米の民藝運動研究者からの日本への批判が動機であります。柳宗悦先生の民藝美論を世界普遍の哲学、社会改革の運動としてどう提起するか、微力ながら現場にいる一人として考えたいと思います。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)